

平成30年度「不登校に関する研修会」講義記録

【第2回】平成30年8月2日（木）県立丹波の森公苑

テーマ： 「不登校の子どもの願いと保護者・教職員の役割
～つながって生きるために～」

講師： 春日井 敏之（立命館大学大学院教職研究科 教授）

1 はじめに …「働く」ということ

- ・ 自分が好きなことを追求しながら、それが誰かのためになっているということが大切である。社会とつながって自分を生きるということ。
- ・ 「自分の好きなことをやって、誰かを助けられたらいいな」という不登校を経験したある青年の一言は、働くことの本質を突いている。
- ・ 誰かのためになっているという実感を得ることは大切である。これが、しんどくなった時のエネルギーになる。仕事もスポーツも同じではないか。

2 対人援助職としての教師

- ・ 子どもを助けながら、じつはこちらも助けられている（双方向の関係）。そのことに対する感謝の気持ちを自分の言葉で伝えることが大切である。
- ・ 日常生活の中の小さな自己決定を大切にする。その積み重ねの中で主体性は育つ。→文科省が言う「主体的・対話的な深い学び」につながる。
- ・ 教師は子どもの時に良い子だった人が多い。良い子には、SOSが苦手です。一人で頑張ってしまう傾向がある。そんな教師が、子どもたちと集団づくりを展開していくことの困難さがある。

3 指導の軸に支援を位置づける

- ・ 子どもの権利条約より…子どもは、「守られる権利」だけでなく、「生きる権利、育つ権利、参加する権利」の主体として尊重されるべき。
- ・ 支援にあたっては、短期、中期、長期それぞれの視点から子どもを見て関わっていくことが大切である。
- ・ 特にネット社会の中で、プライバシーの権利、ハラスメントの視点など、被害者にも加害者にもならないための性教育が大切である。
- ・ 対人援助職としての教師は、子どもに対する援助の枠が、子ども自身のニーズとずれていないか常に気を配る必要がある。
- ・ 「ほめる」「叱る」は大切であるが評価を伴う。評価には、落とし穴がある。

いつもほめられ続けるのはつらいし、「ひいきだ!」「なんで僕ばかり?」といった不信も生まれる。外面だけではなく、内面的な変化を見逃さないセンサーを持つことが大切である。すべての子どもに対して、かけがえのない存在として「愛と敬意」を払うことが土台となる。

4 チーム学校が機能するために

- ・ チーム学校が機能するためには、関わる教職員の当事性と同時に、主体性が大切である。評論家ではなく、担任や生徒指導担当として、自分はどう考えるのか、どうしたいのかである。
- ・ 若い教師が自分からSOSを出すことが苦手であるならば、ベテランの教師が自分の失敗談を語るといい。若い教師が、SOSを出しやすい雰囲気をつくるのが大切である。
- ・ 内閣府（2010）の調査（5,000人のひきこもり青年への対面調査）から…ひきこもりになったきっかけの計44%が「就職活動のつまずき」と「就職した職場になじめなかった」であった。失敗を乗り越える力を育てるには、小中高校で失敗を経験させることも必要である。失敗しても排除されない練習付きの学級、学校づくりが大切である。
- ・ 「チーム学校」が機能するためには、学校長のリーダーシップと教職員、専門機関との連携が大切である。
- ・ チーム学校のメンバーには、子どもも入っている。わからないことは、子どもに聴くことである。

5 その他

- ・ 教育相談を軸にした生徒指導を展開する際に、まず「聴く」ことに重点を置くこと。「聴く」ことの重要性は、解決請負人になるのではなく、感情を受けとめること、一緒に考えるということにある。
- ・ ケース会議では、ともすると子どもの言動の意味を理解するという視点で、分析から入ってしまうことが多い。その前に大切なことは、相手（子ども・保護者）の感情を、ねぎらいの気持ちをもって受けとめていくことである。
- ・ キャリア教育の大切さが、新学習指導要領でも強調されている。当面の進学、就職指導の前に、将来どんな人間になりたいのか。その人間がどんな形で社会や人と関わっていくのかが仕事や生き方になる。人としての生き方やあり方を考え合うキャリア教育が大切である。